

鳥祐
越田
文善
蔵雄
編

上方狂言本

二

古典文庫

鳥祐
越田
文善
蔵雄
編

上方狂言本
二

古
典
文
庫

古典文庫第一八七冊

昭和三十八年二月二十日 印刷発行

(非売品)

校者

祐田善雄
鳥越文蔵

本言狂方上
二

発行者 吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷所 帝都印刷製本株式会社

発行所

東京都(巣鴨分室局区内)
北区西ヶ原町三ノ三四

古典文庫

電(九一九)二七一七

振替口座東京一四五九七番

目次

凡例	三
解説	五
本文	
一、熊谷名残盃	一三
二、福寿丸	一六
三、 卯月九日 其あかつき 明星茶屋	二三
四、蟬丸二度の出世	二六
○	
挿絵集	一〇四
挿絵等目次	四五〇四八

凡 例

一、『上方狂言本』の第二冊目として、東洋文庫蔵の「熊谷名残盃」、国立国会図書館蔵の「福寿丸」〔卯月九日其あかつきの〕「明星茶屋」、東京芸術大学音楽学部図書館蔵の「蟬丸二度の出世」の四篇を収めた。

一、翻刻は第一冊目の基準に拠つたが、通読の便を計つて、原本の句読点以外にも任意に加点を施した。その場合には文字一字分を空白にした。なお、底本の欠字は□印で埋めたが、推定できる場合には右側に注記した。

一、解説は書誌的なことに限り、出来るだけ簡単にした。

一、本書の刊行に当つて、原本の披見と翻刻を許可された東洋文庫・国立国会図書館・東京芸術大学音楽学部図書館に謝意を表します。「明星茶屋」についてお世話になつた朝倉治彦・長谷川強のご両氏、謄写と校正に助力を仰いだ植谷元氏に対し、深く感謝申します。

祐田善雄
鳥越文蔵

解 説

祐 田 善 雄

熊谷名残盃

東洋文庫 蔵

半紙本一冊。表紙は黒の原装。題簽・方箋ともにもとのもの。本文は三丁より十四丁表まで、見返しは丁附十四の裏であるが、九と十の丁附が飛丁で九十の一丁分になつてゐるため、合計二十二頁。挿絵は見開き全面の大絵が三ヶ所と片面が一ヶ所で、計七頁。柱記は「なごり」。版元は八文字屋八左衛門である。

元禄七年九月京都村山平右衛門座興行。題簽にもある如く、市川団十郎が京都出演した時のお名残り狂言である。

福 寿 丸

国立国会図書館 蔵

半紙本一冊。表紙は黒の原装、原題簽であるが、脇題の方箋を欠く。本文は三丁

より十四丁表まで、見返しは丁附十四の裏であるが、九と十の丁附が飛丁で九十の一丁分になつてゐるため、合計二十二頁。挿絵は見開き全面の大絵が三ヶ所と片面が一ヶ所で計七頁。柱記は「ふくじゆ丸」。版元は八文字屋八左衛門である。

元祿九年十一月興行。山下半左衛門が始めて早雲長太夫座の座本になつた時の顔見世狂言で、「こゝに四条川原の大夫本山下半左衛門は、かほみせをし町々へ札に出しが……ようこそおじやつた・半左衛門ははじめてじや さかづきを出せ」(二一〇頁参照)とあるのはその当込みであらう。秋葉芳美氏の「京阪歌舞伎年表より」(雑誌『上方』掲載)によると、作者は白石彦兵衛である。

三番統の第一は竹嶋幸左衛門、第二は山下半左衛門の持ち場で、両者の芸比べが顔見世の趣向であつたが、秋葉氏によれば、前者の好評に対し後者は不評だつたと言はれる。菊の花を持つて「手だての花いくさ」を拍子舞で舞つた幸左衛門の演技が、前者の好評を博した理由のみに違ひない。これを狂言本では「おの／＼花を手に持て・花いくさこそおもしろけれ・かもんはきくの花に成・まふつうたふつふむひやうし・おの／＼みこれゐたりける。」(九八・九九頁・挿絵18頁下

段参照）と簡単に済ましてゐるが、『落葉集』第二卷中興当流所作に所掲の歌詞で補ふと、拍子舞が見せ場であつたことが納得できるだらう。『落葉集』では、本文の題名は「花軍」、目録は「菊の花軍」となつてゐる。

卯月九日
其あかつきの

明星茶屋

国立国会図書館 蔵

半紙本一冊。表紙は黒の後装、題簽はあるが、脇題の方箋はない。本文は三丁より十三丁表まで、見返しは丁附十三の裏に相当、九と十の丁附が飛丁で九十の一丁分になつてゐるため、合計二十頁。挿絵は見開き全面の大絵が二ヶ所、見開き下段のみが一ヶ所。柱記は「明星」。版元は八文字屋八左衛門である。

元禄十年五月、京都都万太夫座上演。高野辰之氏がこの本を紹介して元禄十年四月上演とされて以来、一般に四月説が踏襲されたが、長谷川強氏が『法文論叢』第十一号（昭和三十四年六月）の「武士国土産その他」で考証された通り、五月とするのがよい。見返しの口上に「昨月九日の口・明じやうが茶やにて・人をあまた切ましたと申ます」（一二四頁・挿絵26頁参照）とあるから、明星が茶屋の人殺

しは四月九日に行はれて、芝居に上演したのは五月とするのが妥当であろう。

せみ丸二度の出世

東京芸術大学音楽学部図書館 蔵

半紙本一冊。表紙は黒の原装、原題簽、原方箋。本文は三丁より十二丁表まで、見返しは丁附十二の裏であるが、九と十の丁附が飛丁で九十の一丁分になつてゐるため、合計十八頁。挿絵は見開き全面の大絵が三ヶ所の計六頁。柱記は「せみ丸二」。版元は正本屋九兵衛である。

元禄十一年京都布袋屋梅之丞座興行。

『役者略請状』の宮崎伝吉の条に次の記事がある。

〔宮崎伝吉〕扱去顔見世狂言（元禄十三年十一月江戸森田座、題名未詳）に村山大江之助に成て、……二番めにおやのかんどうをうけ、我屋敷へ立かへり戸ばそに立より、内のやうすをしのび見らるゝ所女房寄木にあはるゝあいさつよし、おやのきげんをうかゞはるゝ所、さりとほこまかにて見所おほし、扱おや刑部に門外へおい出され、ひとりごとにおやの事を女房へ頼れ、さむさをしのぎかね

らるゝ所、内より刑部羽織をへいごしになげし時に、礼をいはるゝ所見所有、刑部戸をあけし時、物いはずたがいのしうたんよくうつり、諸見物袖をしぼらぬものなし、後に竜王丸お乳になり来り、女房寄木をころさんとする時、さはぎを聞つけへいをのりこし、竜王丸を打とめらるゝりゝしさどうも云れず、此所大坂にて「蟬丸二度の出世」の狂言に、すぶんちがはず、京にて竹嶋幸左衛門いたされしが、此人と合ていづれをいづれと申がたし、とかく上手でなければ出来まじき所也

「大坂にて蟬丸二度の出世の狂言」といふのは、『岩井半四郎さいご物語』に「とらの年（元禄十一年）には山下又四郎と藤川武左衛門、是もはかどらずして、やう／＼せみ丸ばかりがきゝました」とする岩井半四郎座の『蟬丸』をさしてゐるのであつて、正しい題名が『蟬丸二度の出世』であることがこの記事で判つた。さうなると、ここに収めた京都の狂言本とは別に、大阪でも同じ『蟬丸二度の出世』を上演したことが考へられる。大阪系と似た江戸狂言に対する右の評判と京都の狂言本（一九〇頁ゝ二〇〇頁）とを比較するに、村上大江之助とせんじゆ太郎、

竜王丸と逆髪王子、親刑部とせんじゆ入道、女房寄木と太郎の女房の如く、役名の相違はあるが、筋の似てゐることは認められるであらう。

もう一步進めて、岩井座の一枚刷り番附絵が『元祿歌舞伎小唄番附尽』（稀書複製会本）に載つてゐるから、狂言本の役者附と比較すると、次の如くである。

（役名）

（京都布袋屋座）

（大阪岩井座）

逆髪王子

沢井園右衛門

篠塚次郎左衛門

蟬丸の宮

歌村才十郎

村上竹之丞

北の方

岸田小才次

浅尾十次郎

腰元ばせを

竹中きよの介

上村吉三郎（役名推定）

右大弁早広

関山八郎左衛門

三原十太夫

中納言希世

竹嶋幸十郎

藤川武左衛門

清 賞

染川十郎兵衛

岩井半四郎

せんじゆ太郎

竹嶋幸左衛門

山下又四郎

右によつて京都と大阪とは同じ狂言を上演したことが推定できる。一口に

同じ狂言と言つても、京都・大阪・江戸ではそれぞれの土地柄に応じて趣向を変へたから、細部では各自の特色を出してゐたことと思ふ。かかる小異を除外して大筋において大阪と江戸とが「寸分ちがはず」と言ふなら、役名の共通した大阪と京都の方がもつと似てゐたと思ふ。それだからこそ芸評で江戸の宮崎伝吉と京都の竹嶋幸左衛門とを比較しても不都合には感じられなかつたのである。第一冊の解説で触れた如く、その当時は京都と大阪とで同じ狂言を競演することがよく行はれたのであつた。

なお第一の牢破りには「梵天国」の趣向を嵌め込んでいる。

立役 大和屋甚兵衛

村山平右衛門

立役 市川団十郎

くまがへ さかづき

なごりの盃

市川団十郎いとまごいの狂言

ふ屋町通

八文字屋

八左衛門

(挿絵1頁参照)

くまがへなごりのさかづき付リ□(な)さけをかけ□(色)もみち
并ニよろいをかけるまつ 三番續

上 一つどもゑ女□(す)がた 付ゑびらをみる哥の誠

中 二ゑぎぬいといすがた 付かなしみをみる兵物の□(誠)

下 三つのねがい悦びすがた 付おもかげをみる仏身の誠

一 こざいしやうのつばね いわ井花のぜう

一 はゝうへ かめ四郎三郎

一 下女 ふぢ川喜右衛門

一 いわやのほういん 天井又右衛門

一 たいらの道もり さかた藤九郎

立役

一 さつまの守たゞのり 大和屋甚兵衛

一 女ばう 玉川さんや

一 あつもり おのへたがのせう